〔保育学〕
〔研究ノート〕

「幼児と健康」に向けた授業内容の一考察

領域「健康」専門的事項に求められる授業内容の一考察
―モデルカリキュラムを手がかりにして―

弘中陽子*1
(*1 宇部フロンティア大学短期大学部　保育学科)

Consideration on Teaching Required for "Health" Associated
― Based on Model Curriculum ―

Yoko Hironaka*1
(*1 Department of Nursery Education, Ube Frontier College)

本研究は，本学の令和 5 年度からの新課程における授業開講に向けて，一般社団法人保育教諭養成課程研究会が提示しているモデルカリキュラム，及び著者が昨年度担当した科目「保育指導法（健康)」の授業内容をもとに，新設科目「幼児と健康（仮称)」の授業内容構築の検討を図るものである．モデルカリキュラムを本学の新設科目「幼児と健康（仮称)」の授業内容を構築するためのひとつの柱として捉え，「領域に関する専門的事項」モデルカリキュラム「幼児と健康」，及び保育教諭養成課程研究会が提言した，「幼児と健康」のモデルカリキュラムの考え方，授業モデルを研究対象とし検討を行った結果を基に，今後の質の高い幼稚園教諭養成を目指したよりよいカリキュラム及びシラバスの構築を進めていく．

キーワード：領域に関する専門的事項,モデルカリキュラム，領域「健康」
Keyword: Technicality of Areas, Model Curriculum, Health Associated

1. はじめに

中央教育審議会答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い，高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～」(平成27年12月)を受け，教育職員免許法の一部の改正が行われた．それに伴い，新しい教職課程では，より実践的指導力のある教員を養成するため，「教科に関する科目（大学レベルの学問的・専門的内容)」と「教職に関する科目（児童生徒への指導法等)」等に分かれている科目区分を，教科の専門的内容と指導法を一体的に学ぶことを可能とする「教科及び教職に関する科目」の大括り化が行われた．それに伴い，幼稚園教諭養成課程では，「領域および保育内容の指導法に関する科目」が創設された．

この「領域及び保育内容の指導法に関する科目」は，領域論である「イ　領域に関する専門的事項」と，指導法からなる「ロ　保育内容の指導法（情報機器及び教材の活用を含む.)」で構成されている．中でも，「イ　領域に関する専門的事項」は，教科に関する科目が撤廃され，新たに設置されたものであるがゆえ，変更が大きいものである．

今回の改定にあたり，文部科学省より委託を受けた一般社団法人保育教諭養成課程研究会が，幼稚園教諭の資質能力の向上に向けた，幼稚園教諭の養成課程のモデルカリキュラムの開発を目的とした調査研究を行っている[1]．

その報告書[2]では，「領域に関する専門的事項」の考え方，及びシラバス作成の際の留意事項，授業担当者に求められることの3項目について，次のようにまとめられている．

（1）「領域に関する専門的事項」の考え方
〇領域について、領域それぞれの学問的な背景や基盤となる考え方を学ぶことを基本とする.
幼稚園教育において、「何をどのように指導するのか」という視点で見たときの「何を」を深める部分である．幼稚園教育要領に示されているねらい及び内容を含めながら、これらに限定されることなく、より幅広く、より深い内容が求められる.

（2）各大学等におけるシラバスを作成する際の留意事項
〇領域の内容に関する授業担当者の専門を生かしつつ、モデルカリキュラムの一般目標や到達目標を踏まえ、当該領域に関しての専門的な知識・技能等を修得できるよう、工夫していく.
〇授業モデルを参考にして、主体的・対話的な深い学びとなる過程を保証する授業を構想していく.

（3）授業担当者に求められること
〇「保育内容の指導法（情報機器及び教材の活用を含む）」の各領域担当者と連携をとる必要がある.

出典：平成28年度幼稚園教諭養成課程のモデルカリキュラムの開発に向けた調査研究－幼稚園教諭の資質能力の視点から養成課程の質の保証を考える－＜文部科学省幼児期の教育内容等深化・充実調査研究委託「幼稚園教諭の養成の在り方に関する調査研究」より抜粋＞
尚，下線は著者記入.

しかし，教職課程再課程認定等に関する説明会における質問回答集[3]からもわかるように，「領域に関する専門的事項」の内容に関する質問がいくつか見られる．中川らは，このような状況を踏まえ，「領域に関する専門的事項」で取り扱うべき具体的な内容の共通的な認識が形成されていないと指摘している[4].

そこで，本学の令和5年度からの新課程における授業開講に向けて，一般社団法人保育教諭養成課程研究会が提示しているモデルカリキュラム，及び著者が昨年度担当した科目「保育指導法（健康）」の授業内容をもとに，新設科目「幼児と健康（仮称）」の授業内容構築の検討を図ることを目的とする.

2. 方法

2.1.研究対象

このモデルカリキュラムを本学の新設科目「幼児と健康（仮称）」の授業内容を構築するためのひとつの柱として捉え，「平成28年度幼稚園教諭の養成課程のモデルカリキュラムの開発に向けた調査研究－幼稚園教諭の資質能力の視点から養成課程の質保証を考える－」の報告書（2017年3月一般社団法人保育教諭養成課程研究会）[2]で示された「領域に関する専門的事項」モデルカリキュラム「幼児と健康」，及び同研究会が提言した，「幼児と健康」のモデルカリキュラムの考え方，授業モデル[5]を研究対象とした.

尚，この「領域に関する専門的事項」のモデルカリキュラムは，教職課程コアカリキュラムに準じた意図をもち，あくまでも各養成校のシラバス作成の参考すべき資料として提示されたものである．授業実践事例や授業モデルを示し，各養成校が必要に応じて自由に活用できるようになっている.

2.2.研究手続き

まず，一般社団法人保育教諭養成課程研究会が提言した「幼児と健康」のモデルカリキュラムの考え方[5]を読み解き，教育内容（「何を」にあたる部分）として重要だと思われる文言（以下，授業づくりポイント，とする）を抜き出し，モデルカリキュラムで掲げられている「到達目標」（10項目）ごとに分類，整理を行った．また，昨年度著者が担当した「保育指導法（健康）」の授業内容において，領域「健康」の専門的な理解を深めることに繋がる内容を取り上げ，先に挙げた授業づくりポイントと照合し，教育内容の過不足について検証するとともに授業内容を構築するための課題を明らかにした.

尚，本研究で参考とした領域「健康」に関する専門的事項のモデルカリキュラムは，次のとおりである（表1）.

領域「健康」のモデルカリキュラムは，全体目標をもとに4つのまとまり（1. 幼児の健康 2. 体の諸機能の発達と生活習慣の形成 3. 安全な生活と病気の予防 4. 幼児期の運動発達と身体活動）で構成されている.

表1 領域「健康」に関する専門的事項のモデルカリキュラムと考えられる授業モデル

全体目標	当該科目では、領域「健康」の指導に関する、幼児の心身の発達、基本的な生活習慣、安全な生活、運動発達などの専門的事項についての知識を身に付ける。	
1.幼児の健康		
一般目標	幼児期の健康課題と健康の発達的意味を理解する。	
到達目標	１－①	乳幼児の心と体、運動発達などの健康課題を説明できる。
	１－②	健康の定義と乳幼児の健康の意義を説明できる。
2.体の諸機能の発達と生活習慣の形成		
一般目標	幼児期の体の諸機能の発達と生活習慣の形成を理解する。	
到達目標	２－①	健康の定義と乳幼児の健康の意義を説明できる。
	２－②	乳幼児の基本的な生活習慣の形成とその意義を説明できる。
3.安全な生活と病気の予防		
一般目標	安全な生活と怪我や病気の予防を理解する。	
到達目標	３－①	幼児の安全教育・健康管理に関する基本的な考え方を理解している。
	３－②	幼児期の怪我の特徴や病気の予防について説明できる。
	３－③	危険に関しリスクとハザードの違いと安全管理を理解している。
4.幼児期の運動発達と身体活動		
一般目標	幼児期の運動発達の特徴と意義を理解する。	
到達目標	４－①	乳幼児の基本的な生活習慣の形成とその意義を説明できる。
	４－②	幼児期において多様な動きを獲得することの意義を理解している。
	４－③	日常生活における幼児の動きの経験やその配慮などの身体活の在り方を説明できる。

考えられる＜授業モデル＞

授業モデル	a)	講義の初めの段階で、健康に関する現代的課題で身近でかつ広範囲にわたっていることを理解するため、最近の子供たちの生活や体力などの資料を提示し、子供の健康に関する課題を考える機会を設ける。 〈到達目標〉１－①、１－②、２－②、３－②、４－①、４－②
	b)	幼児の気になる姿や体のおかしさなどを学生自らが考える機会を通して、そのほとんどが幼児の健康に関わる身近な問題であることを理解し、その背景について考える。 〈到達目標〉１－①．１－②．２－②、３－②，４－①、４－②
	c)	危険に関し、リスクとハザードの違いとその内容を理解するため、幼児にとっての危険な場所や遊び方など実際に探したり体験したりするなどの機会を設ける。 〈到達目標〉２－①、３－①、３－②、３－③、４－②
	d)	身近な環境や遊具などを活用し、投げるやころがるなどの多様な動きを理解したり、これらの動きを引き出す環境を体験しながら理解する機会を設ける。 〈到達目標〉４－①、４－②、４－③

出典：文部科学省．「平成28年度幼稚園教諭の養成課程のモデルカリキュラムの開発に向けた調査研究－幼稚園教諭の資質能力の視点から養成課程の質保証を考える－（報告書）」．p11．2.「領域に関する専門的事項」のモデルカリキュラム（1）幼児と健康．筆者作成.

3. 結果と考察

3.1.モデルカリキュラムにみる授業づくりのポイント

モデルカリキュラムで掲げられた「到達目標」は，＜学生が一般目標に到達するための達成すべき個々の基準を表したもの＞である．この学びの基準を達成するために，「何を」を視点として授業内容を組み立てるか，が大変重要となってくる．そこで，一般社団法人保育教諭養成課程研究会が提言した「幼児と健康」のモデルカリキュラムの考え方，及び授業モデル[5]を読み解き，授業づくりポイントを抽出し，表にまとめた（表2）．

このモデルカリキュラムは，領域「健康」の指導に繋がる基礎的知識・基礎的技能を身に付けることを目指す内容としている．領域「健康」の指導に繋がる基盤となる考え方を修得するためには，担当教員も広く，乳幼児の健康を捉え，網羅する必要がある．「何を」の視点をもとに，できるだけ学生が主体的・対話的で深い学びを修得できるための授業方法の工夫として，DVD等の視聴覚教材や体験学習の必要性が見えた．

表2 モデルカリキュラムにみる授業づくりのポイント

NO.	モデルカリキュラムにおける到達目標	モデルカリキュラムにみる授業づくりのポイント（「何を」を視点としてキーワードを抽出）			
1－①	**乳幼児の心と体、運動発達などの健康課題を説明できる。**	乳幼児の気になる姿や体のおかしさ（体の動きのぎこちなさ）への気づき（調査研究や新聞記事等の資料を活用）	気になる姿から考える健康課題（身近で広範囲にわたる課題であることへの気づき）	健康課題の解決に向けた手立ての検討	
1－②	**健康の定義と乳幼児の健康の意義を説明できる。**	乳幼児期に望ましい姿を重ね合わせる	乳幼児期にふさわしい健康な姿（明るく伸び伸びと）		
2－①	**乳幼児の体の発達的特徴を説明できる。**	乳幼児期特有の発達の特徴（身長や体重、骨の形成、生理的機能の発達等）	乳幼児期の体の発達の特徴から考えられる生活上の留意点	体の発達と心の発達の密接な関連	
2－②	**乳幼児の基本的な生活習慣の形成とその意義を説明できる。**	基本的な生活習慣の形成	生活習慣の形成と自立の密接な関連（意欲との繋がり）	必要感をもった主体的な取り組み	小学校低学年の姿との関連付け
3－①	**幼児の安全教育・健康管理に関する基本的な考え方を理解している。**	幼児の安全教育・健康管理	安全についての構えを身に付ける機会の保障	幼児の危険を避ける能力	安全に気づく適切な働きかけ（保育者の役割）
3－②	**幼児期の怪我の特徴や病気の予防について説明できる。**	幼児期に罹患しやすい病気や怪我の理解	病気や怪我の予防方法	自分の健康や体への関心	
3－③	**危険に関しリスクとハザードの違いと安全管理を理解している。**	リスクとハザードの違い（小さなリスクへの挑戦）	幼児にとって危険な場所や遊び方等（探索・体験活動）	遊びに内在する危険性が遊びの価値のひとつ	
4－①	**乳幼児期の運動発達の特徴と意義を理解する。**	乳幼児期の運動発達の特徴（しなやかな心と体の発達）	多様な動きと運動発達の特徴の関連付け		
4－②	**幼児期において多様な動きを獲得することの意義を理解している。**	多様な動きの基礎的な理解（幼児期運動指針）	幼児期の動きの経験不足が小学校以降の運動発達に及ぼす影響	レパートリーの多様さとバリエーションの多様さ（動きの視点からの環境構成）	自分の身を守る（安全との繋がり）
4－③	**日常生活における幼児の動きの経験やその配慮などの身体活動の在り方を説明できる。**	毎日の繰り返しの中で動きが身に付く、体が育つ（動きの経験）	社会環境の変化と幼児期の動きの経験との関係性	幼児の身体活動経験を豊かにするための工夫や配慮	

出典：保育教諭養成課程研究会編「幼稚園教諭養成課程をどう構成するか～モデルカリキュラムに基づく提案～」1部4章「幼児と健康」のモデルカリキュラムの考え方（pp38-41），及び第2部授業づくりのヒント（pp92-95）を基に著者作成.

3.2.モデルカリキュラムとの比較

次に，昨年度筆者が担当した「保育指導法（健康）」の授業内容を検証する.「保育指導法（健康）」の授業内容の中で，専門的な理解を深める内容に該当する項目を授業づくりのポイントに照合し，不十分と思われる点を挙げ，表にまとめた（表3）.

3.2.1 幼児の健康

また，各項目における詳細は，次のとおりである.

①：場面を「実習」と限定してしまうことで，列挙する子どもの姿に偏りが見られ，乳幼児期の身近で広範囲にわたる健康に関する課題の理解が不十分である.また，健康に関する課題に対する問題意識への動機付けにも至っていない.

②：学生からの意見をもとに，乳幼児期の子どもらしい健康な姿への説明に繋げるものの，それぞれの健康課題の解決に向けた手立ての検討まで及んでいない.

表３ 「保育指導法（健康）」の専門的な理解を深めることに繋がる内容と不十分な点

NO.	モデルカリキュラムにおける到達目標	「保育指導法（健康）」における専門的な理解を深めることに繋がる内容	不十分な点
Ⅰ－①	**乳幼児の心と体、運動発達などの健康課題を説明できる。**	教育実習（5日間）で出会った子どもの姿から「健康な子ども」を捉える。（ワークシート（場面・子どもの姿・取り挙げた理由）に記入後、学生同士意見交換。グループ発表。）	・身近で広範囲にわたる健康に関する課題の理解 ・健康に関する課題に対する学生自身の問題意識への動機付け ・健康に関する課題の解決に向けた検討
Ⅰ－②	**健康の定義と乳幼児の健康の意義を説明できる。**	健康な子どもの姿から「子どもの健康」について考える。	
2－①	**乳幼児の体の発達的特徴を説明できる。**	乳幼児の発達の特徴のひとつとして、身長と体重の発達の特徴と体格の発達について理解をする。 「身長測定」の実践を通して、体や健康への興味関心を導くための支援方法を検討する。	・乳幼児期の骨の形成や生理機能の発達の理解　→基本的生活習慣の形成への繋がり ・体の発達の特徴から考えられる生活上の留意点（保育者の視点）
2－②	**乳幼児の基本的な生活習慣の形成とその意義を説明できる。**	園生活における生活習慣を育むための保育者の支援方法を理解する。（テキストの事例を用い、場面ごとに考察する）	・体の発達からみる基本的な生活習慣の形成（手指の発達段階に限っている）
3－①	**幼児の安全教育・健康管理に関する基本的な考え方を理解している。**	安全管理と安全教育の視点、及びバランスについて理解する。	・映像の視聴や探索活動等といった体験を通した理解
3－②	**幼児期の怪我の特徴や病気の予防について説明できる。**	子どもの怪我の実態（場所、遊具、部位、時間帯）を理解する。	・乳幼児期に罹りやすい病気の特徴や発生のメカニズム、そして予防方法
3－③	**危険に関しリスクとハザードの違いと安全管理を理解している。**	リスクとハザードの定義、及び違いを理解する。	・遊びに内在する危険性（リスクとハザード、安全管理と安全教育）
4－①	**乳幼児期の運動発達の特徴と意義を理解する。**	子どもの運動機能の発達過程、及び乳幼児期の発達段階の特徴を理解する。	・幼児期運動指針の理解
4－②	**幼児期において多様な動きを獲得することの意義を理解している。**	子どもの体の動きを理解する。	・幼児期の動きの経験不足が小学校以降の運動発達へ及ぼす影響（幼少接続） ・子どもの動きを引き出す環境構成（動きと環境の関係）
4－③	**日常生活における幼児の動きの経験やその配慮などの身体活動の在り方を説明できる。**	体を動かす遊びの場面の観察を通して、年齢に応じたからだの動きを理解する。	・多様な動きと環境との関係（無理なく子どもに経験させる環境・思わずやりたくなる環境）

3.2.2 体の諸機能と発達と生活習慣の形成

①:「身長と体重」を取り挙げるものの，骨の形成や生理的機能の発達の理解まで及んでいない．また，ここでは，身長測定を用いて，子どもの健康やからだへ気づきを促すための方法理解を結び付けて行っている．そのため，体の発達の特徴から考えられる生活上の留意点の考察には至っていない．

②:運動機能の発達として，手指の発達段階を踏まえた基本的な生活習慣の形成（食事，衣服の着脱）の解説は行うものの，内容として不十分であった．

3.2.3 安全な生活と病気の予防

①:机上での言葉の理解に留まり，子どもたちの遊び場面や遊び方における具体的な危険（小さなリスクへの挑戦，ハザードの違い）を判断する目を養う体験が得られていない．実際に大学構内等の危険な場所や遊び方などを探索するといった体験的な活動からの理解が必要である．

②:怪我については，テキストや資料をもとに説明を行ってはいるものの，乳幼児期の罹りやすい病気に関して触れていなかった．他の科目と内容が重複していたこともあり，病気に関しては特に取り組んでいなかった．ただ，こうした病気に関する基礎的な知識は，子どもの命を守る上で予防にも繋がるものである．今の時期であれば，乳幼児に罹りやすい感染症の特徴や発生のメカニズムを理解した上で，予防方法に取り組まなければならない．園でみられる怪我や病気の実態も踏まえ，基礎的な知識を身に付ける必要がある．

③:子どもたちが好んでよく遊ぶ固定遊具のブランコとすべり台を例に，子どもの年齢別の対応策として安全管理と安全教育を検討する授業展開を行った．学生たちは，机上ではなかなか子どもたちの遊び場面のイメージが持てず，意見を導き出すことが難しかった．実際の子どもの遊びの様子や遊び場面（DVD等の視聴覚教材の活用）から潜む危険の理解を深める必要がある．

3.2.4 幼児期の運動発達と身体活動

①②③:平成30年度幼稚園教育要領の改訂[6]の「ねらい及び内容」において，「内容の取扱い」が，幼児の発達を踏まえた指導を行うに当たって留意すべき事項として新たに示された．領域「健康」の内容の取扱い(2)では，「多様な動きを経験する中で，体の動きを調整するようにすること」という，幼児期運動指針（平成24年3月文部科学省）を踏まえた文言が加わった．

幼児期の「多様な動き」の理解には，運動遊びに限ったことではなく，日常生活の中でもさまざまな動き（歩く，運ぶ，持つ，しゃがむ等）を経験しているという認識が必要である．また，「多様な動き」の獲得は，訓練ではなく，日常の生活と遊びの中で繰り返し経験することにより，獲得するものである．こうした視点を持ち得るためにも，基礎的理解に加え，幼児期にふさわしい運動遊びの在り方や多様な動きを導き出す環境構成について，体験を通した理解が必要となる．

4. おわりに

本研究では，保育教諭養成課程研究会が作成したモデルカリキュラムのひとつ「幼児と健康」を基に，「何をどのように指導するか」という「何を」に視点を置き，求められる教育内容を整理することで，授業づくりのポイントを明らかにすることができた．そのポイントからみた，昨年度著者が担当した「保育指導法（健康）」の授業内容（専門的な理解を深める内容を抜粋）は，基礎的な理解においても保育現場や子どもたちの実態に基づいた視点，及び，子どもの姿や場面を想定した体験的な学びによる理解の欠如が見られた．

入江ら（2018）[7]は，「モデルカリキュラムは，それ自体がある一定の養成の方向性を示しつつも，教え手の裁量や解釈，力量に任されている部分がある」と指摘している．この新教職課程では，各養成校が目指す幼稚園教諭像に応じて，創意工夫による実践力・指導力のある幼稚園教諭を養成することが求められている．

本学の令和5年度の新設科目「幼児と健康（仮称）」の開講に向けて，本研究で得た知見を基に，具体的な授業内容や方法の検討を進めていく．また，実践力・指導力のある幼稚園教諭の養成を目指し，指導法の連携した授業展開や他の教員や保育現場との連携を図る創意工夫を継続的に取り組んでいくこととする．

5. 参考文献

1) 文部科学省，幼稚園教諭の養成の在り方に関する調査研究，文部科学省，2017.
2) 一般社団法人保育教諭養成課程研究会，平成28年度幼稚園教諭の養成課程のモデルカリキュラムの開発に向けた調査研究ー幼稚園教諭の資質能力の視点から養成課程の質保証を考えるー，一般社団法人保育教諭養成課程研究会，2017.
3) 文部科学省，教職課程再課程認定等に関する説明会

資料【資料4】教職課程再課程認定等説明会質問回答集（平成30年1月9日版），文部科学省,2018. https://www.mext.go.jp/a_menu/shotu/kyoin/1399256.htm（確認2020/11/27）.
4）中川智之・橋本勇人・入江慶太他，幼稚園教諭課程における「領域に関する専門的事項」に求められる授業内容に関する一考察ー保育内容領域「人間関係」及び「環境」のモデルカリキュラムを手がかりとしてー，川崎医療短期大学紀要，38号，pp63-69，2018.
5）無藤隆代表保育教諭養成課程研究会編，幼稚園教諭養成課程をどう構成するか～モデルカリキュラムに基づく提案～，萌文書林，2017.
6）文部科学省，幼稚園教育要領解説＜平成30年3月＞，フレーベル館，2018.
7）入江慶太他，幼稚園教育要領改訂に伴う保育内容領域「健康」に求められる授業内容に関する一考察ー新しい教職課程におけるモデルカリキュラムとの比較を通してー，川崎医療短期大学紀要，38号，pp89，2018.